

巻頭言 心のなかの防疫線

稲葉奈々子

2019年度は新型コロナウイルス問題に終わり、2020年度は新型コロナウイルス問題で始まった。上智大学も3月の卒業式にはじまり、4月の入学式など新学期の一連の行事を中止し、春学期の授業はすべてオンラインで行うことになり、キャンパスへの立ち入りもできなくなった。いつどこで誰から感染するかわからないがゆえに、社会全体が疑心暗鬼に陥っている状況に、10年以上前にマリ共和国を訪れたときのことを思い出した。

1度目は、大学の共同研究者たちと一緒にだった。私もそうだが、共同研究者たちもアフリカ研究が専門ではなかった。では何のための旅行だったかといえば、植民地主義を切り口として、現代アフリカの社会や文化を研究しようとするものだったのだが、ここでは研究の中身はさておいて、そのときの同行者たちの防疫体制がすごかった。出発前に可能な限りすべてのワクチンを接種するのはもちろん、到着後は、食事前に手だけでなく、皿もフォーク、ナイフも除菌ティッシュで消毒する。ガイドの唾から髄膜炎に感染しないように、距離をとる。蚊に刺されないように、どんなに暑くても肌は露出しない。同行者だけではなかった。レストランで近くの席だった欧米系の旅行者と思われる人たちは、瓶に口をつけて直接飲むことを避けるために、ストローでビールを飲んでいて、「危ない菌やウイルスが蔓延しているから」である。何らかの対策は必要だろうから、万全の防疫体制をとること自体に問題があるわけではない。それでも違和感を拭い去れなかったのは、どう見ても、現地に住むほとんどのマリ人はそのような防疫線の外側に置かれていたからだ。

2回目にバマコに行ったときは、フランスから帰国した移民の調査のためだった。ちょうど友だちのフランス人マリ人と滞在時期が重なって、彼女が居候していたマリ人が住む下町で、手弁当で小学校を開校したマリ人たちに何度か会った。その校長が、「ホテルに泊まるなら、うちに泊まってよ」と何度も頼んでくる。ホテルに払う金があるなら、自分の家に宿泊して1泊1ユーロでも2ユーロでも払ってもらえると助かる、ということなのだが、私はためらった。ホテルでないとWi-Fiに接続して仕事ができないからという、もっともらしい理由はあったが、実は私の頭のなかにも防疫線が引かれていたと思う。

その校長が、たびたび発熱しては寝込んでいる。理由をきくと、マラリアに罹っており定期的に高熱がでるのだという。抗マラリア薬は飲んでいないという。副作用が強いため、短期間の旅行中に限って飲むことはありえても、予防のために一生飲み続けられるような薬ではないのだ。彼の家に泊まるという選択肢は完全になくなった。ところが今度は、私と同じホテルに滞在していた日本人研究者が夜中に発熱した。彼女にはマリ人の恋人がいて、その人の故郷で現地の人と同じ生活をしたあとのバマコ滞在であった。苦しいから救

急車を呼んで欲しいというので、電話をしたところ、空港で怪我人がでたとかで救急車は出払っているという。医者は電話で問診しながら、緊急性はなさそうだから、翌朝病院に来ればいいという。朝になって病院で診療を受けたところ、チフスだった。伝染病なのでそのまま入院かと思いきや、ホテルに戻って普通に生活してよいという。そういわれても、ホテルのほうから滞在を拒否されるかと恐れたが、オーナーも従業員も「あら、じゃあ夕飯どうする？」というぐらいで、特に心配する様子もない。その後私がバマコからパリに戻ってしばらくして、マリーもマラリアに罹って苦しんだと知らされた。

つまり、普通に生活していると、かなりの確率で何らかの病気に感染してしまう社会なのだ。だいたい、私が訪問した頃のマリーの平均寿命は約53歳であった。ほぼ、今の私の年齢である。病気を避けるためには、衛生管理の行き届いたホテルに閉じこもって外出は必要最低限にするしか方法はない。まさに新型コロナウイルスが蔓延した日本の現状である。旅行者とマリ人の間に引かれた防疫線は、外出せずにテレワークで給料がもらえる私のような正社員と、これまでどおり普通の生活をしていると感染のリスクが高まるとわかっていても、仕事に行かざるをえない職業や雇用形態の人たちの間に引かれている。あるいは閉じこもることができる安全な家がある人と、そうでない人の間にも引かれている。何か月かはわからないが、しばらく耐えればウイルスの拡大は終息するであろう。しかし、防疫線は心のなかにとどまらず、安定した生活を送る層と、そうでない層の間の格差と不平等を、今よりもくっきりと示す政治的な線となるだろう。この格差と不平等は、ウイルスと同様、意識的に取り組まなければ消えないし、多くの人の命を脅かすだろう。

大学も、今は防疫対策で手一杯だが、事態が収拾した暁には、防疫対策が残した禍根に研究機関として取り組まねばならないだろう。

稲葉奈々子 (いなば ななこ) (グローバル・コンサーン研究所所長)